

# 高山

たかやま  
高山の原生林を守る会

会報 第 53 号

2005 年 6 月



## 水源の森復元ボランティア&龍ヶ岳観察会

6月5日(日)に緑の回廊一斉観察会を兼ねて、鳩峰牧場の植林と龍ヶ岳観察会を行いました。参加者は24名でした。植林も今回で4回目となり、参加者は過去最小でしたが作業に慣れたのかミズナラ、アカシデ、トチノキ、ヤマグリ、イタヤカエデ等500本の苗木を植えつけることができました。また今回、初めて現地で採取した苗を育成したブナとカスミザクラを小幡さんが持参し、植えつけました。その苗はいずれも見事に生長したもので皆さん感心していました。

今年は例年より植物の生育が1週間ほど遅れているため、昨年まではいつも咲いていたタニウツギやアキグミの花は未開花でしたが、それに変わりトチノキやアズキナシの花が満開で、沢ではコチャルメルソウ、サワハコベ、オオバタネツケバナ等の花を観察することができました。また牧場の隅にある小沼ではモリアオガエルが産卵中で貴重な生物の生態を観察する幸運にも恵まれました。

今回で全ての牧場の植林が終わり JA おきたまと福島森林管理署の事業は今年で終了となります。なお4カ年で植林した苗は1500本となりました。車の乗り入れ等で枯死した苗もありますが、80%以上は活着しており、今後は補植と生育状況の見回りが中心となります。次年度からは会独自の取り組みとして継続していく予定ですが、植林する苗の本数も少なくなり、時間的にも余裕ができることから新たな企画を工夫していければと思っています。



最後の植林地

「第4回水源の森復元ボランティア・緑の回廊一斉観察会」に参加して 広沢 久美子

植林は初めての経験でしたが、さまざまなことを体感させていただきました。牧草地の土は固いから、雨も吸収されず、生物の少ないことを実感しました。

木々に包まれた川辺は、高木の下、チャルメルソウ、ミズナ、サワハコベ等植生が豊かです。どんな動物たちが、水を求めて集まってくるか、想像力がふくらみます。

牧草地の下、木々に隠されるように小さな沼がありました。木の高い所には、モリアオガエルの卵があります。湿地には、シュゲールアオガエルの卵が数ヶ所に点在し、産卵中のモリアオガエルの姿がありました。鮮やかな緑色の体、まぶたの輝くような橙色に圧倒されてしまいました。卵の白い塊にそっと触れると、弾力があり、中の卵をしっかりと守っています。水中は全体的に暗く、黒くどんよりしていて、サンショウウオやイモリが静かに息づいていました。

開けた牧草地に戻ると、大きなトチノキが堂々とした花を咲かせ、目にとびこんできました。気温が上がってきたようで、ハルゼミの音がにぎやかになりました。森が多くの命を育むことを体感することができました。野生動物が自由に往来できる豊かな森につながり、広がっていくことを望みます。何十年か先、ツキノワグマがあその時に植林したクリやアキグミ、ミズナラの実を口にすることを想像するだけで、楽しくなります。

龍ヶ岳観察会では、ヤマツツジが満開でした。エゾタンポポは、やさしい黄色で、アズマギクは、ハルジオン（春紫苑）の花に似ていました。ノミノフスマの小さな白い花を見ていると、つい笑顔になってしまいます。低木の林を歩くと、幹に縦に並んで二個、セミのぬけがらを発見。透明感のある茶色でした。下の笹の葉に隠れるようにハルゼミがじっとしていました。ウラジロヨウラク（裏白環珞）は印象に残りました。鐘型の赤い花が枝先に数輪ついています。登っていくと、咲く前の、黄色を帯びた薄緑色の苞の状態を観察することができました。ヤナギの葯をルーペで見ると、黄色の他に橙色も見えて、美しい世界でした。山頂近くの木は、芽出しの途中。大きなエネルギーを感じさせてくれました。



植林風景



モリアオガエル



ウリハダカエデ



エゾハルゼミ



今回の観察会は、3年前から企画されながら、悪天候のため今年まで延期されていたとのことでした。

したがって、今回参加できたことは誠に幸運でした。総勢14人で、それぞれスノーシューやスキーを履き、東吾妻山山頂を目指しました。最初の急斜面を登ると、傾斜の穏やかな地形にオオシラビソなどの針葉樹の森が広がっていました。所々に、灰白色の捻れた木肌を持つ巨大な枯木がモニュメントのように立っており、その姿を見上げると神聖な気持ちになり、心を打たれました。佐藤守さんから、オオシラビソ、キタゴ

ヨウマツ、コメツガ、ナナカマド、ダケカンバ、アズマシャクナゲ、ガンコウランなどの説明を受けました。日頃、亜高山帯には殆ど行かない私にとって、それらの説明は新鮮でした。また、東吾妻山頂上からみた景観は、快晴に恵まれ素晴らしい一言でした。

ところで、今回の観察会で特に印象に残ったことが、二つありました。一つは、東吾妻山山頂のハイマツ群落の荒廃ぶりです。ある程度予想をしていたものの、実際に見るとショックを受けました。そのような中でも、千切れてしまった裸地化防止用ロープを根気強く結びなおす会員の姿を見て、私も微力ながらお手伝いをさせて頂きました。二つめは、高橋淳一さんが、針葉樹（オオシラビソ?）の虫こぶを指摘されたことです。珍しいものと思われ、調べてみました。

今回見つかった虫こぶは、エゾマツシントメカサガタフシに似ていると思われました。寄生者はアブラムシの一種（エゾマツカサアブラムシ）で、その形状は、エゾマツ（北海道）やトウヒ（本州）の枝先に形成される球果状である。針葉が短縮・肥大してその基部間隙が虫えいとなる・・・とのことでした。（文献1）このような虫こぶが、以前から東吾妻山の針葉樹に存在していたかは不明です。また福山は、地球温暖化と森林害虫との関係について、明らかな因果関係は不明としながらも、北海道の天然林の針葉樹（ハイマツやキタゴヨウマツ等）に、最近害虫の発生が増えていることを報告しています。さらにエゾマツカサアブラムシに代表される吸汁性害虫のアブラムシは、気温上昇によってその発生密度が増すとされています。（文献2）地球温暖化による亜高山帯の植生変化が、明らかになるまでには、かなりの時間がかかるとは思われますが、同地域の針葉樹等の虫こぶに注目することで、早期の地球温暖化兆候の新たな知見が得られるかも知れません。最後に今回の有意義な観察会の企画をしてくださったスタッフの方々に感謝申し上げます。



またこのような観察会の機会がありましたら、ぜひ参加したいと思います。

#### 引用・参考文献

- 1：\*「日本原色虫こぶ図鑑」 湯川淳一・柘田長編著 全国農村教育協会 1996 p99-105.
- 2：地球温暖化と森林害虫―北海道を例として 福山研二著  
\*温暖化に追われる生き物たち」堂本暎子・岩槻邦雄編 築地書館 1997 p318-335.
- 3：「虫こぶハンドブック」薄葉重著 文一総合出版 2003 p13.  
\*印の書籍は、福島県立図書館所蔵書籍です。

## 仁さんの森のコラム

### F S C 認証紙

渡辺 仁

6月10日の福島民友新聞に、こんな記事がありました。

「郡山市 F S C 認証紙を採用 全国自治体で初 環境計画冊子に」

「初もの」は、それだけでもニュースになるわけですが、WWF ジャパンの事務局長も郡山市の今回のPRに同行したとのことで、「これって、そんなにスゴイことなの？」という感想を持つ人も少なくないのではないかと思います。

ごく大雑把に言えば、「適切に管理された森林」から生産された紙を使用したということです。紙の原料を生産したその森林が、適切に管理されていることを認証したのが「F S C」という国際的な機関なのです。F S CはForest Stewardship Councilの略称だそうで、日本語では「森林管理協議会」となっています。

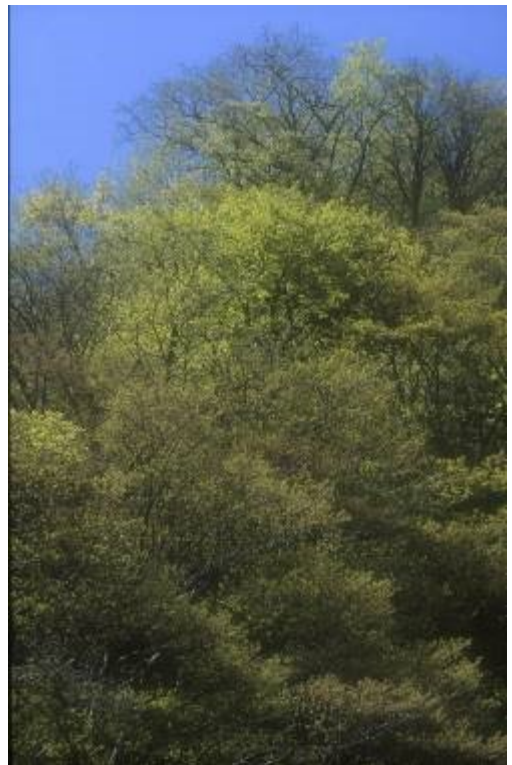
F S Cのような機関によって、「持続可能な森林経営」のための一定の基準を満たした森林に格付けを与えることを、「森林認証制度」といいます。一番有名で実効性もあるとされるのが、1993年にWWFが中心となって発足したF S Cですが、森林認証制度はこれ以外にもたくさんあって、『森林認証と林業・木材産業』（全林協2004）という本によると世界で50を越すそうです。ちなみに、日本でも『緑の循環』認証会議」という認証制度が、2003年6月にスタートしました。

しかし、森林認証制度にも問題のあるものがあります。たとえば「マレーシア木材認証協議会」は、先住民族の生活の場である森林の伐採にも認証を与えているなど様々な欠陥によって、グリーンピースから激しく非難されています。この他にも、業界団体の自主的なラベリングにすぎないような認証制度もあるようで、「森林認証」を得ていますというだけでは、その製品が環境に配慮したものであるということとはできないようです。

ところで、肉・魚・野菜あるいは米などの食品関連では、産地表示というものが義務化されてきましたが、木材に関しては、製品の段階でその産地がわかるものはまだまだ少ないと思います。まして「紙」となると、古紙使用率によってエコマークがついたとしても、そのパルプ材がどこの森林を切った木でできたものかということまでは、なかなか知りえないというのが現状だと思います。

たとえば、南会津のブナ林からも、これまで実に大量の樹木が「パルプ材」として切り出されて紙になり、私たち消費者の手元に届いているわけですが、「これが南会津のブナ林からできた紙です」とは知りえないのです。日本の紙に使われる木材チップは、輸入モノが年々増加してきて、「生態系への配慮なく伐採した木材」という意味で現在最悪のものは、おそらくタスマニア産のものということになるかと思っています。「この紙は、タスマニアのオールドグロス林からできています」と表示してあるような紙を、日本人は胸を張って使うことができるのでしょうか。しかし、実際には、原生林を切り倒した木から作った紙を使っているかもしれないわけです。

こうなると、「F S C 認証紙」を使うということが、どのくらい意義のあることなのかが少しはわかるのではないかと思います。その紙は、ホームセンターで特売している紙の数倍の価格かもしれません。しかし、よく考えると、それがほんとうの紙の値段で、産地表示もエコマークも何もない特売紙は、生態系破壊型の搾取林業による紙なのかもしれません。



## ひとにぎりの土に

山内幹夫

4月24日の東吾妻観察会に参加して、佐藤守さんのレクチャーの中で、「ダケカンバの種は何十年も土の中で眠っているが、オオシラビソの木が倒れて間隙ができるとすかさず発芽する」という話がとても印象に残った。確かに、オオシラビソ林やブナ林の中でダケカンバがポツンと点在している風景はよく目にする。しかしそのお話からは、森が森たらしとする幾多の可能性を示唆した深い意味を感じることができる。

たとえば森の草木を今の人間に、林床の土を銀行にたとえたとするならば、林床の土に蓄えてある様々な植物の種子が次世代への資産として代々相続され、樹木が倒れては新たに発芽して資産運用され森が維持されていくのではないか。土の中には樹木のみならず、様々な草本類の種も含まれ、万一の時にも、森という状態が復元される財産がパックされているものと理解した。しかし、種子も土の中で眠り続けられるものとそうでないものがあり、人手により森が相当な面積伐開されれば、保水力も弱まり土壌浸食が進んで、自力での回復が困難な状況にもなりうるだろう。

広く樹木が伐られ日が当たるようになって、眠っていた種子が発芽し、その森で今まで確認できなかった植物が繁茂開花している様子を最近をよく目にするようになった。中には絶滅が危惧されている種類もある。私も一昨年从去年から今年にかけて、福島や白河近郊の伐開された丘陵裾部から今までお目にかかれなかったような植物と出会う機会が多くあった。最初は喜んでいたが、良く考えれば当たり前の現象で、いわば森の悲鳴に似た開花だったのかもしれない。

林床の植物を観察すると、茎がある程度まで伸び、葉は出るものの開花しない多年草も見られる。これは日陰のために開花しないのであって、倒木などのため間隙ができ日光が当たるようになればやがて開花し結実するだろう。間隙が新たな樹木の成長により塞がれば、その多年草は再び眠りにつき、種子が眠る土は森を形成する樹木に守られることだろう。ゆえに、何十年ぶりに日が当たった斜面に花咲いた植物を人間の欲望のおもむくままに盗掘することは絶対にやめてほしい。

福島県は広く落葉広葉樹林帯のエリアにあり、林床土壌は落葉が積もって腐食した豊かな植壤土である。その土は植物の成長を支えるとともに、未来の森を保証する種子を蓄えるという素晴らしい力があることを知ってほしい。

当会で実施している水源の森復元のための植林事業は、やがて、育った樹木が林床の土のパワーを回復させ、いつしか極相林を目指した森の営みが復活することであろう。登山道ロープ補修事業は高層湿原の泥炭層の破壊をくい止め、やがて高山植物を育てる壤土の形成につながるだろう。ひとにぎりの土を見ていると、土が土であり続けることが当たり前ではなく、いかに困難かを考えさせられる。そして、その困難さの原因の大部分が人間の自然破壊であることも。



芽生えはするが、日陰のため開花に至らない。枯葉の下の土中にはたんさんの種子が眠る。



林縁に日当たりを得て咲く花。やっと得られた開花条件。大切にしよう。